

Ⅲ 調査結果に見られる青年の意識と行動の特徴及び支援の課題

1. 宮城県の青年の意識と行動の特徴～平成8年調査・全国調査との比較を通して

ここでは、今回実施した調査の結果と平成8年に宮城県青年会議・宮城県青年活動研究所が実施した宮城県青少年の意識調査（以下、平成8年調査とする）の結果、および全国調査の結果との比較を通して、今回の調査に回答した宮城県の青年の特徴を明らかにしたい。

なお、質問紙の文章・ことばづかいや選択肢の内容等が異なることもあり、厳密な比較が困難であるため、大まかな傾向をとらえ比較することとした。また、調査対象も調査によって異なることから、調査対象の属性等が近似するようにした。

（1）経年変化（平成8年調査との比較）

まず、前回とほぼ同じ内容を質問している項目の調査結果の比較を通して、意識の特徴の変化を探ることとした。ここでは、平成8年調査の対象年齢に合わせ18歳から30歳までのデータから大学生、専門学校生を除いたものを分析の対象とする。

①地域への定住意識

定住意識からみる青年の地域に対する愛着度について触れたい。今回の調査では、平成8年調査同様に、現在住んでいる市町村に将来も住みたいと思うかを聞いているが、「住みたい」（「一生住みたい」＋「できれば住みたい」）が約6割（58.6%）、「移りたい」（「できればよそへ移りたい」＋「是非よそへ移りたい」）が約2割（23.1%）、「わからない」が約2割（18.0%）であった。平成8年調査でも、「住みたい」が約6割（57.8%）あったことから、定住志向が強いという傾向に変化が見られなかった。

②地域活動への参画意欲

地域活動についての参画の希望（企画、運営に関わりたい）について質問をしたところ、「特にない」と答えた人は全体の2割弱（17.3%）であり、回答があった青年の約8割が、何らかの地域活動へ参画したいという意欲を示している。平成8年調査においても、8割近くの青年が地域活動に対して参画意欲を示していたことから、地域活動への参画意欲を持つ青年が多いという傾向に変化がみられなかった。

また、参画を希望する内容については、「お祭りなどの地域行事」（55.6%）、「スポーツ、レクリエーションの催し」（42.5%）が上位に挙げられているが、スポーツに関する活動については、平成8年調査（「各種スポーツ大会」）でも比率が高くなっていた。

③休日の過ごし方（現在）

「休日の過ごし方」で比率の高いものとして、平成8年調査では「テレビ（テレビゲーム）、

新聞を見て過ごす」(47.8%)「読書・音楽や映画鑑賞、お茶・お花等の趣味やけいこ等で過ごす」(30.0%)「寝ている」(26.9%)が上位にあがっていた。このように、平成8年調査では主に自分の趣味や休養に時間を使う青年が多かったのに対し、今回の調査では「友人とともに過ごす」(55.5%)「家族とともに過ごす」(46.8%)を選択するものが多く、自分の身近なところの人間関係を大事にしていこうとする傾向がみられる。

④個人的に悩んでいること

個人的に悩んでいることの上位4項目を比較してみると、今回の調査では「仕事(職場)のこと」(15.2%)、「自分の生き方のこと」(13.3%)、「お金(収入)のこと」、「恋愛、結婚のこと」の順になった。平成8年調査では「自分の生き方のこと」(24.2%)、「仕事(職場)のこと」(16.0%)「恋愛、結婚のこと」(15.1%)「お金(収入)のこと」(13.8%)の順になっており、順位に変化はあるものの、内容には違いがみられなかった。

⑤将来の生き方・暮らし方

将来の生き方・暮らし方に関しては、最も多かった回答が、平成8年調査では、「趣味を大切に自分の好きなように暮らす」(36.4%)であったのに対し、今回の調査では、「家族のために努力する」(36.2%)であった。

なお、「社会のために貢献する」や「社会的な地位を得るように頑張る」と回答した人は、平成8年調査同様少数で、「個人志向」が強いという傾向に変化はない。

(2) 全国調査との比較

次に、内閣府の『第7回世界青年意識調査』や『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査』の結果との比較を通して、宮城県の青年の意識と行動の特徴の一端を探ることにしたい。ここでは、内閣府の両調査の対象年齢にあわせ18歳から24歳までのデータを分析の対象とする。

①地域への愛着度

現在住んでいる市町村が「好き」な人(18歳~24歳)は約9割(「好き」43.5%+「まあ好き」45.9%)であったが、この数値は、内閣府の『第7回世界青年意識調査』(18歳~24歳、85.1%)や『第2回青少年の生活と意識に関する基本調査』(18歳~24歳、86.6%)の結果とほぼ同じである。

②地域への定住意識

現在住んでいる市町村に今後も「住んでいたい」人は46.1%(「一生住みたい」9.6%+「できれば住みたい」36.5%)、「移りたい」人は31.0%(「ぜひよそに移りたい」12.1%+「できればよそに移りたい」19.9%)で、定住希望者の方が多かった。この傾向は『第7回世界青

年意識調査』や『第 2 回青少年の生活と意識に関する基本調査』の結果にも見られたが、定住希望者の比率は『第 7 回世界青年意識調査』が 33.2%、『第 2 回青少年の生活と意識に関する基本調査』が 41.8%であり、今回の調査のほうがやや高い。

③地域活動への参加

今回の調査では、1 年間に参加した地域のイベントや活動で「お祭りなどの地域行事」(28.2%)や「スポーツやレクリエーションの催し」(9.0%)「子どもたちのための活動」(7.2%)が上位を占めたが、『第 2 回青少年の生活と意識に関する基本調査』の結果をみても、これらが上位にあがっている。ただし、「子どもたちのための活動」の比率を比べると、『第 2 回青少年の生活と意識に関する基本調査』の結果（「子どもたちのための活動」2.5%）を大きく上回っており、子どもたちのための活動への参加率が高いことが、宮城県の青年の特徴の一つである。

④生活への満足度

満足度に関して、「自分の生活」「学校生活」では、今回の調査と『第 7 回世界青年意識調査』で傾向に差はあまり見られなかった。

しかし、「職場生活」について、満足と答えた人は今回の調査では 42.1%（「満足」11.6% + 「やや満足」30.5%）であり、「日本の社会全般」について満足と答えた人は 18.2%（「満足」3.7% + 「やや満足」14.5%）だった。一方、『第 7 回世界青年意識調査』では、「職場生活」に満足と答えた人は 71.3%であり（「満足」26.3% + 「やや満足」45.0%）、「日本の社会全般」について満足と答えた人は 35.3%（「満足」4.2% + 「やや満足」31.3%）であり、今回の調査の結果と著しい差が見られた。宮城県の青年の特徴の一つとして、職場生活と日本の社会全般に対して、満足している人の割合が低いことがあげられる。

以上、平成 8 年調査、全国調査の比較から各項目について検討してきたが、ここから明らかになった、宮城の青年の特徴について触れることにしたい。

地域活動の項目で、「子どもたちのための活動」と答えた人が全国調査と比較して高かったこと、「お祭りなど地域の行事」と答えた人が全国調査同様高かったこと、定住意識についても、全国調査よりも定住希望者の比率が高かったこと、平成 8 年調査と同様に、青年の地域活動への参画の意欲が強いことに宮城の青年の特徴が表れている。ここにはこれまで、地域内で行ってきた地域活動や自分が住んでいる地域を大切にしながら、参加するだけでなく、自分の興味・関心にあった地域の活動の企画や運営の担い手になりたいという気持ちが表現されているように思われる。この思いが実現に結びつくような、また今後もこのような高い数値を維持できるような条件を整備していくことが求められる。

例えば、リーダー養成事業や指導者養成事業のような敷居の高い事業だけではなく、青年が足を運びやすく、携わりやすい事業についての環境整備が必要ではないだろうか。

このような視点から考えると、宮城の青年の特徴として、前述のように「子どものための活動」に参加している人が全国調査と比較しても多いことから、子どもとともに地域の文化や地域の課題に目を向け、子どもと青年・大人が共に地域をつくっていくことができるような事業などがその支援策としてあげられる。子どもを通じた事業などのように足を運びやすい事業に企画、運営の段階から関わることで、子どもを通して参画した青年間に、人間関係が形成されるような青年活動支援が求められる。

また、今回の調査結果から見えてきた個人志向が強い傾向にある青年や、休日の多くを家族や友人と過ごすことが多く、自分の身近な人間関係から、広がりを持つ機会があまりない青年にとっても、このような支援は、自分の経験・知識・技能を生かす場を見出すきっかけづくりになるのではないだろうか。今後は、青年が携わりやすいような事業によって青年間の人間関係を豊かにすること、地域活動の裾野を広げることが重要ではないだろうか。